

故武藤守一先生追悼の言葉

経済学部長 足立政男

去る九月二十日に御逝去された武藤守一先生に謹んで追悼文を捧げ、経済学部を代表し衷心よりお悔み申し上げます。

昨年来の大学紛争のなかで、先生はわが経済学部長・学園理事としてその正常化のために日夜を分かたず心血をそそがれ、さらに本年二月以降は総長として立命館教学の振興に全力を傾倒されて来られました。先生を中心とする学園の体制も軌道にのり、七〇年代における立命館のあり方と展望が開けようとした矢先に先生の急逝に際会したことは、経済学部は勿論のこと学園関係者をいしれない失望と空虚と悲しみの深淵に投込みました。会者常離のことわり通り如何に前世からの宿命とはいえ、先生の御急逝にあい幽明境を異にしようとは夢にも思われなかったことであり、私達にとつては最大の痛恨事であります。

先生は明治四三年岐阜県に生まれられ、昭和十一年三月、本法経学部経済科を卒業、同十八年教授、爾来三四年六ヶ月という長い間教壇に立たれ、その間学生部長、教学部長、経済学部長、総長といった要職につかれ、末川先生が総長として御在任中は常にそのよき女房役としておつとめになられ、寢食を忘れてわが立命館学園の振興と、平和と民主主義の学風の樹立に挺身されて来られたことは学園関係者にとつては周知の通りであります。

先生は経済学者としてまことに幅の広い研究成果をあげておられます。これを専門的に分類すれば、金融経済論、経済政策論、経済学理論の三分野に分けることができます。そのうちでも金融経済論の領域は先生の研究における本命であり、数多くの著書、論文を学界に発表され、その御専門の講義を受けて経済学部に進んだ方々の脳裡には、深く先生の緻密な研究成果が実を結んでいるものと思われれます。

又、先生はマルクス経済学の立場からそれぞれの学問分野を攻究されており、その金融経済論も貨幣理論からの展開であり、殊に戦後日本資本主義の動向ならびにインフレーションの現象分析には先駆的な業績を残されております。

ところで、先生は単なる経済学の理論家としてだけではなく、その実践家としても実に輝かしい業績を残されており、その御活躍は大学内にとどまらず、日中友好運動をはじめ、京都における平和と民主主義の諸運動でも大きな貢献を果され、細まやかな愛情と理解でもって後学の士に極めて貴重な指標を示され、勉学と実践への意欲と勇気を与えて下さっております。

七〇周年を迎えた立命館大学に、その生涯を捧げて逝かれた生料の立命館人としての先生を喪った経済学部一同は、ここに先生の御生前における御功績をたたえ、共に心から御追悼申し上げ、先生の御遺志を受けつぎ、さらに発展させていくことが先生の残された偉大な業績に応える唯一の道であると信じております。

ここに謹んで先生の御逝去をお悔み申し上げ、同時に私達の決意の一端を披瀝して追悼の言葉と致します。

武藤守一先生、どうか安らかに眠り下さい。

一九七〇年十月